

“濃飛流紋岩類” 白堊紀火山活動の

一形式について

濃飛グループ

河田清雄 山田直利 村山正郎

磯見 博 片田正人

わが国にはいままで、“石英斑岩”とばくぜんと呼ばれ、火山活動とも深成活動ともむすびつかない半深成岩類として扱われてきた岩体があった。そのもっともよい例は、中部地方の内域（恵那山—美濃高原—飛驒山地）に広い面積をしめている酸性火成岩類である。この岩体は、いままで“石英斑岩”という名で呼ばれ、詳細な岩石学的な研究はもちろん、その地質の状態についても明らかにされていなかった。つまり岩石学的にも1つの盲点であった。私たちは、中央アルプスの領家帯にひきつづいて、現在この酸性岩体の分布地域の図幅調査を行なっている。その結果、この岩体は、主として流紋岩熔結凝灰岩からなる累層であることがわかった。私たちは、この岩体を“濃飛流紋岩類”と各付けた。“濃飛流紋岩類”は、ほぼNW-SE方向に延び、その総延長は約

130 km、その幅は最大約40 kmである。また、その面積は概算5,000 km²にたつし、体積は約3,000 km³に及ぶ。このような広大な流紋岩熔結凝灰岩を主とする火山碎屑流は日本ではもちろん最大のものであるが、SmathaのToba地方、(1,000 km³)、Montana州Elkhorn Mountains、(4,000 km³)など外国の例に較べても世界的な規模をもつものであろう。“濃飛流紋岩類”は単一のFissure eruptionやCentral eruptionによって生じたものではなくて、基盤の古生層の破碎帯に生じた多数のfissureから噴出したものである。中部地方の内域では白堊紀に流紋岩類—花崗斑岩—花崗岩にいたる火成活動が行なわれ、流紋岩類と花崗斑岩、花崗岩はそれぞれ特徴的な配列を示して分布している。流紋岩類から花崗岩類にいたる火成活動は、後期中生代白堊紀の1つの特徴ともいべきもので、“流紋岩類”は、白堊紀を代表する火山活動の産物としてクローズアップされる。

これと同じような例は中国山地にみられるほか、沿海州や北米地方を主とする環太平洋地域にも知られており、白堊紀火成活動の研究の焦点となるであろう。

(地質部)

地質調査所月報 第12巻 第6号 訂正

地質調査所月報第12巻、第6号、28—(462)頁、第2図aと第3図a（図のみ）が左右入れ替っておりますから第3図aは第2図aに、第2図aは第3図aに訂正致します。